

新春

博物館長が語る

筑波山と「聖護院道興」



糸賀 茂男

土浦市立博物館館長
上高津貝塚ふるさと
歴史の広場館長
常磐大学 名誉教授

市民の皆さま、明けましておめでとうございます。本年の無事を祈念いたします。さて、年頭の私の所感、昨年の思いを再度筑波山に絡めて申し上げ、より豊かな筑波山史を浮上させましょう。

聖護院道興とは

聖護院道興（一四三〇～一五二七）は、室町時代の京都聖護院に止住した高僧です。その出自は貴族の中の貴族北家藤原氏流近衛家で、父の房嗣と弟の政家は、ともに関白・太政大臣でした（資料①）。道興自身は出家して寛正六年（一四六五）に准后宣下を受け、当時の仏教界の最高位を占めました。准后とは、太皇太后（天皇の祖母）、皇太后（天皇の母）、皇后に準ずる地位の称号です。道興は、聖護院門跡（皇族・貴族出身の僧の役職）のほか、園城寺長吏、熊野三山検校などを兼務し僧位は大僧正に達しました。

道興の巡錫

道興が生きた時代は、京都政権（朝廷・室町幕府）の動揺が顕著でした。そうした政権の意向なのか、道興は列島各地の聖護院配下の掌握と強化を目指して旅を始めました。道興は、文明一八年（一四八六）六月に京を発ち、北陸経由で関東へ、さらに東北にも至りました。東下九ヶ月のかなり余裕ある巡錫（布教の旅）とも見て取れます。

常陸国山田の慶城坊

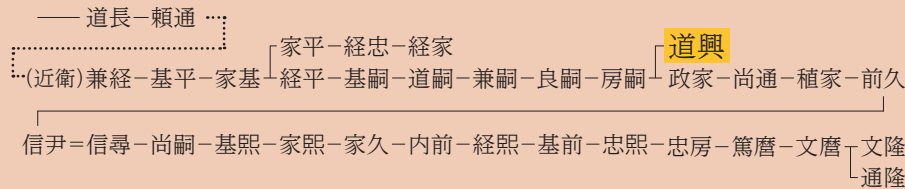
道興は旅の道中、克明な日記『廻国雑記』を残しています。寺社や武家屋敷などに滞在しながら詠んだ和歌や漢詩が『廻国雑記』には多数残されており、さながら貴顕紳士の独断的真骨頂を見せています（資料②）。

道興が逗留した山田は、現在の桜川市真壁町東山田です。山田にあった慶城坊は、この地に居住する筑波修験の拠点（大先達）でした。この坊を一時の宿泊地として、道興の筑波登山が実現しました。この経緯は『廻国雑記』に詳しく書かれており、この記事からこれまでも道興の寄留譚が知られていました。

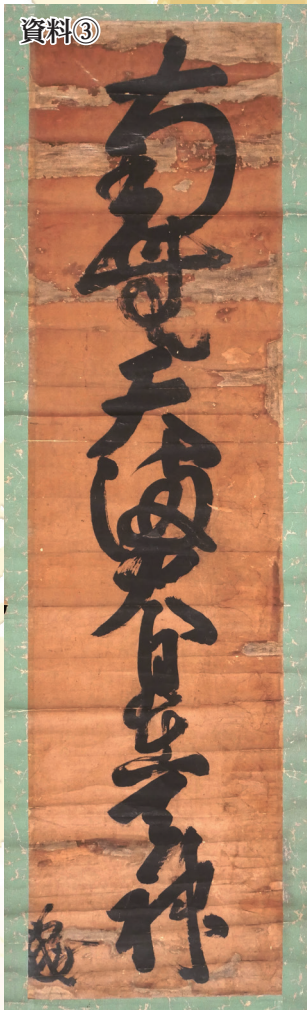
『廻国雑記』が伝える道興がこの地で初めて詠んだ歌は、めぐり来て 今日 是 吾妻のひたち帯 結び添えてや 草枕せん 九月二四日に筑波山中腹の大雪、中禅寺を参詣した際には、いづれをか 深し浅しとながめまし もみじの山のけさの初雪と詠んでいます。

ここで皆さまに披露したい墨書が、天神名号（菅原道真を祀るための掛け軸）「南無天満大自在天神」です（資料③）。慶城坊末裔の個人が所蔵するもので、一九九三年に発見され、筆致と花押から道興の自筆であることが確認されました。この揮毫は『廻国雑記』の記述にはありませんが、道興が慶城坊で行った「聖廟法楽」（菅原道真供養）との関連を想起させます。

資料① 北家藤原氏系図



資料③



聖護院門跡道興筆天神名号
(茨城県指定文化財、個人所蔵)
写真提供：桜川市教育委員会

筆致などの一致から
道興自筆と確認



道興准后
代官職補任状
(1481年)



道興准后置文
(年月日未詳)

『廻国雑記』にみる道興が辿った旅路
(概略図、経路は推定の部分を含む)

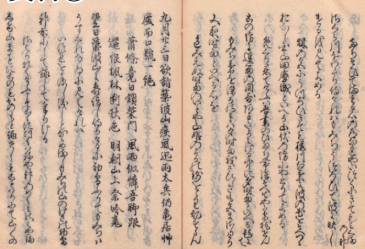


本山派修験

山岳登拝行を重視する修験道は、日本仏教の在り様の一つで、天台宗(寺門派)系では本山派、真言宗系では当山派と呼ばれます。本山派は一四世紀までに聖護院を、当山派は醍醐寺を拠点として、列島の山岳をそれぞれの修行場としました。道興は、本山派の最高位を占めつつ、諸国修験の護持・発展に努めました。つまり、道興の筑波登山は単なる遊山ではなく、諸国を巡る旅の途中にあつて、関東の名山、筑波山中の修験組織を守護する目的もあつたように思われます。この時期の一山は、筑波氏族の拠点でもありました。数百名とも言われる一行の旅は、日本天台系修験の威圧とも読み取れるでしょう。

後の戦国期に筑波山が真言宗化していった推移を考えると、天台の山として存在した筑波山のすがたが、道興の登山を通して幻のように見えてきます。今に残る山中の行場「六十六所の岩場」は、筑波山禅定として筑波修験を伝えるものですが、この道興の登山こそ、本山派による筑波修験の史実を示すものです。

資料②



『廻国雑記』写本(国立公文書館所蔵)



筑波山



聖護院山門

写真提供：聖護院